

立ち上がる団地の母親たち

——『彼女と彼』における直子の曖昧な身体

今井 瞳良

はじめに

映画『彼女と彼』(羽仁進監督、1963年)の団地に住む主婦である直子の身体は曖昧である。映画研究者の堀口典子は林美美子原作・成瀬巳喜男監督の『めし』(1951年)において、主婦である三千代が空間的・身体的に低い領域におかれていることを指摘している。女性の空間として機能している台所は茶の間から一段下がった場所に設計され、空間的に低い領域を占めているとともに、女性が茶の間に上がった場合は這って行く「床拭き」をすることで身体的に低い領域におかれているという¹。直子にも「床拭き」をするシーンがある。しかし、直子の身体に寄っていたカメラが引いていくと直子が拭いているのは床ではなく、押し入れの二段目の床を拭いていることが明らかになる。三千代のように茶の間の床を拭いているのではなく、押し入れの二段目に上がり、その床を拭いているのだ。直子は空間的には高い位置を占めながらも、身体的には低い姿勢をとるという曖昧な状態におかれている。直子は立ち上がってはいないのである。

本稿は、『彼女と彼』の団地的主婦である直子の曖昧な身体がどのような意味を持っていたのか論じていく。これまで、映画における団地の主婦に関してはアン・マクナイトによる団地妻映画の研究がある。マクナイトは『壁の中の秘事』(若松孝二監督、1965年)と『団地妻 昼下がりの情事』(西村昭五郎監督、1971年)の分析を通して、1970年代の団地妻映画における政治性を問題にしている。「政治の季節」後にプライベートな空間である団地において²、家庭の経営者として位置付けられた主婦たちこそが、家庭と政治経済のコンテクストをつなげる政治性を持っていたというのである³。また、原武史による団地研究は、プライベートな空間を越えた集団生活としての団地を問題にしている⁴。原は団地が登場した1950年代半ばから1960年代にかけて主婦たちが中心となって展開された団地自治会の歴史を発掘した。団地の主婦たちは、自治会活動に積極的に参加する政治的な存在だったのだ。その一方で、ロビン・ルブランは郊外における主婦たちの政治行動についてのフィールドワークを行い、政治を忌避する「主婦」というカテゴリーを選択することで女性たちの連帯が生み出されていることを指摘している⁵。主婦が自治会活動という政治的な活動をしていたと論じられる一方で、政治を忌避していたとも論じられているのだ。原とルブランは、主婦たちの「政治」を巡って食い違っているが、連帯に着目している点は一致している。そこで、本稿はまず団地の主婦たちの連帯がどのようなものだったのか、当時の雑誌や新聞、団地住民によるエッセイ、映画の分析を行う。この時に、着目するのは、コンクリートの壁で囲まれたプライベート空間だけでなく、階段や

1

堀口典子「移動する身体」斉藤綾子編『映画の身体／性』森話社、2006年、232-233頁。

2

団地をプライバシーの確保された個人主義的空間として捉える視点は団地論においてよく見られるものである。原武史『団地の空間政治学』NHK出版、2012年、31頁。

3

McKnight, Anne “The Wages of Affluence: The High-Rise Housewife in Japanese Sex Films”, *Camera Obscura* VOL.27, Number 1, 2012, 3頁。

4

原武史の団地研究については主に以下を参照。原、前掲書、原武史『レッドアローとスターハウス——もうひとつの戦後思想史』新潮社、2012年。

5

ルブラン、ロビン、尾内隆之訳『バイシクル・シティズン——「政治」を拒否する日本の主婦』勁草書房、2012年(原著1999年)、79頁。

6
原『団地の空間政治学』、55頁。

7
生活科学調査会編『団地のすべて』医歯薬出版、1963年、91頁。

8
洗濯機や冷蔵庫、掃除機などの家電は1930年代頃から国産化が始まっている。しかし、1940年7月7日に出された奢侈品等製造販売制限規則(七・七禁令)によって国産化は完全にストップしていた。戦後の家電の生産は日本に進駐してきた連合軍とその家族向けに始まったが、1947年5月に洗濯機だけは進駐軍への納入が打ち切られてしまい、日本市場を開拓しなければならなかった。家電の歴史については、山田正吾『家電今昔物語』三省堂、1983年、青山芳之『産業の昭和史6 家電』日本経済評論社、1991年などを参照。

9
天野正子・桜井厚『モノと女』の戦後史——身体性・家庭性・社会性を軸に』平凡社、2003年(原著1992年)、175–177頁。

10
同上、185頁。青山、前掲書、78頁。また、この頃に月賦制度が広まってくる。1950年に東芝が戦後初の月賦制度を開始し、全国的に家電の月賦制度が形成されていった。山田、前掲書、64–65頁。

11
「昭和を熱くした女性50人」『文藝春秋』VOL.68NO.2、1990年、317–319頁。

12
団地の入居には収入条件があり、団地に入居できたのは中間層であった。団地の入居条件について以下を参照、日本住宅公団『日本住宅公団年報'61』日本住宅公団、1961年、本間義人『現代都市住宅政策』三省堂、1983年。

13
『アサヒグラフ』1950年6月28日号。

14
「電気ガマ」『週刊朝日』VOL.63NO.3、1959年、51頁。

15
山田、前掲書、152頁。

公園、集会場など団地の公共空間である。その中で、『彼女と彼』の直子の曖昧な身体がどのような意味を持っていたのか、明らかにしていく。その結果を踏まえて、原とルブランが論じた「政治性」の接続を試みる。

1. 立ち上がる主婦たち

原は、主婦たちが団地の自治会活動の中心を担った理由を「家電製品の普及に伴う余暇時間の増大は、「団地夫人」が・・・保育所や幼稚園の開設を要求したり、集会場などで多様な活動を行ったりすることを可能にした⁶」と論じている。1960年の『国民生活白書』によると、東京都の全世帯での家電の普及率が電気洗濯機49.2%、電気釜25.1%、電気ストーブ13.7%、ガスストーブ37.1%であったが、団地世帯では電気洗濯機76%、電気釜56%、電気ストーブ20.5%、ガスストーブ63.2%であり⁷、団地住民の家電普及率は高い水準を示していた。原が指摘しているように、家電の普及は主婦たちが家事に要する時間を大幅に削減し、時間的な余裕を与えた。確かに、この時間的な余裕が、主婦たちの活動を可能にしたという側面は大きい。しかし、家電が与えた影響はそれだけではない。家電は主婦たちに家事の合理化という発想を与え、交流の場を公共空間へと変化させ、立ち上がる身体を与えるという役割を果たした。



図1 洗濯機広告¹³

の洗濯機は、それ以前の攪拌式と比べて構造が単純で、洗濯時間が短く、サイズも小さく、そしてなによりも価格が安くなった¹⁰。さらに、三洋電機は女優の木暮実千代を広告のモデルとして用いて、「サンヨー夫人」という名で宣伝を打つ。「サンヨー夫人」は洗濯機の顧客層を新しい家庭婦人層に絞った戦略でヒットを飛ばす¹¹。こうした環境の中で、洗濯機は中間層に普及していく基盤を持った¹²。洗濯機は家事において最も重労働であった洗濯を軽減し、洗濯しながら他事ができるという家事の処理方式を根底から変えた(図1)。電気釜についても見ておこう。1955年に東芝から自動の電気釜が発売されると、1959年の『週刊朝日』には「ここ一年というものは、にわかの自動ガマ・ブーム。電気炊飯器はすでに百万を売り尽し、月産十万で不足がちというから大した勢い¹⁴」との記事が掲載される。「眠っている間にご飯が炊ける¹⁵」電気釜は、炊事にかかる時間を削減するとともに、ご飯を炊きながら他事を

家事の合理化について、団地での普及率が高い電気洗濯機と電気釜について見ていこう。国内向け洗濯機の販売は1949年に開始されるが⁸、価格が高すぎたこと、汚れた衣服を洗い上げるのは女のつとめだとする「婦徳」がまだ生き残っていたため、ほとんど売れなかった⁹。ところが、1953年に発売された噴流式

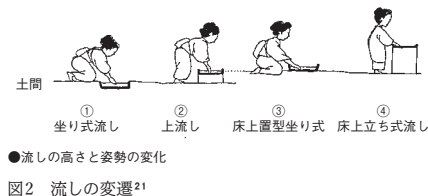
するという家事労働の合理化に貢献した。洗濯機の普及に伴って、「婦徳」の象徴としての家事労働から、労力の無駄を省いた家事労働ほど望ましいとする風潮が生まれて、たらいから洗濯機への移行はかまどから電気釜へという移行と連動していった¹⁶。洗濯機と電気釜の普及は、洗濯をしながらの炊事を可能にし、家事にかかわる時間を大きく削減するとともに、家事を合理的に行うという発想を生み出した。

電気洗濯機の普及は主婦たちにとって、交流の場を変えることを意味していた。電気洗濯機以前のたらい洗濯は、川辺や井戸端、共同水道栓といった共同の場で行われていた。ところが洗濯機の普及によって、洗濯は家の中で行えるようになり、洗濯を通して共同の場で交流を持つことが無くなる。だからといって、主婦たちは部屋に閉じこもってしまい、交流を持つことが無くなったわけではない。原が歴史学者の與那覇潤と行った対談の中で、「初期の団地の場合、高くてもせいぜい5階ですよね。エレベーターもなくて、階段は共同のスペースになる¹⁷」と、団地において階段が共同の空間として存在していたことを指摘している。団地は建物の構造上階段を共有せざるを得ないため、階段は近所付き合いの最小単位となっていた。交流の場として機能していたのは階段だけでない。団地の公共空間には公園もあれば集会場もあった。洗濯機の普及は洗濯を通した井戸端での交流を団地で集団生活をする上で存在する公共空間での交流に変化させたのだ。

また、主婦たちにとって家電は身体感覚を変えるという意味も持っていた。電気洗濯機は腰をかがめて汚れをもみ出す洗濯板を使った洗濯を変える¹⁸。電気洗濯機は、洗濯の際に不自然に腰をかがめる姿勢から女性を解放した。家電の普及は、家事を同時に行うことを可能にし、家事に費やす時間を大きく削減して、家事の合理化を促すだけでなく、主婦たちの交流の場と身体感覚を変えることとなった。

団地には家電以外にも主婦たちの身体感覚を大きく変化したものがあった。団地の標準設備されていたステンレス製の流しである。社会学者の天野正子と桜井厚が指摘しているように「個人住宅向けのステンレス製台の普及は、一九五六年に、公団住宅のDK、すなわちダイニングキッチンに取り付けられたのを皮切りに、大都市を中心

にスタートした¹⁹」。流しの変遷は、「坐り式」から「立ち式」へと使う人の姿勢と密接に関わりながら進んできた。台所の土間にじかに設けられた「坐り式」から、ステンレス製流しの「立ち式」という変化は、女性を「かがむ」や「しゃがむ」という姿勢から解放していった(図2)²⁰。給水と排水をともなう流しが立ち上がるためには、「発足当初から水洗便所、内風呂の完備、上下水道の完備が一つの目玉となっている、当時世間一般の住宅や宅地と比べて極めて高い水準にあった²²」団地のように、インフラ設備も不可欠であった。また、「流しの採用について、非常に大きいもう一つの条件は、それが大量生産されるために規格が統一されているということであった²³」と早期量産が必要であった団地にステンレス製の流しは適していた。団地の標準設備されたステンレス製の流しは、それまで低い姿勢を強いられていた主婦を立ち上がらせるという大きな変化をもたらした。



16
天野・桜井、前掲書、185頁。

17
原武史・與那覇潤「ソ連化した団地とアメリカ化する郊外」、與那覇潤『史論の復権』新潮社、2013年、80頁。

18
天野・桜井、前掲書、169頁。

19
同上、206頁。

20
同上、195-205頁。

21
同上、196頁。

22
日本住宅公団20年史刊行委員会編『日本住宅公団史』日本住宅公団、1981年、94頁。

23
日本住宅公団10年史刊行委員会編、『日本住宅公団10年史』日本住宅公団、1961年、137頁。

24
「家事を新しい目で見直そう」『主婦之友』主婦の友社、VOL.50NO.1、1956年、29頁。

25
入居のために収入条件をクリアしていたとはいえ、団地住民の生活は決して楽ではなく、婦人の内職が広く行われていた。柳田邦夫『団地文明論——住んで見たこと・考えたこと』産報、1963年、17-18頁。

26
1920年に来日したアメリカ人の大学教授マイヤーは「主婦の手から炊事洗濯を取らせ」という文章で「今日、日本の家庭に於いて真先に改むべきことは主婦の手から炊事洗濯を取り放してその時間を他の生産事業に用うることだ。実際日本の主婦はその大部分の時間を之が為に費やして居る。従って社会問題の根本義である子女教育を顧みる暇がない」と提言している。マイヤーは共同することによって炊事洗濯から主婦たちを解放すべきだと提言していくのだが、団地では家電によって主婦たちが解放されたと見ることができる。竹村民郎『大正文化』講談社、1980年、32-33頁。

27
羽仁進の祖母である羽仁もと子は、雑誌『婦人友』を創刊し、「全国友の会」を創立し、家庭生活の合理化を訴えていた。羽仁もと子の活動については、小関孝子『生活の合理化と家庭の近代——全国友の会による「カイゼン」と『婦人友』』勁草書房、2015年に詳しい。

28
「団地の人間関係学」『朝日ジャーナル』VOL.3NO.25、1961年、7頁。

29
同上、7頁。

団地では、ステンレス製の流しが初めから備え付けられており、さらに家事を省力する家電の普及率が高かった。家電とステンレス製の流しによって、団地の主婦たちは炊事洗濯と低い姿勢から解放されたのだ。解放された主婦たちの可能性について、1956年に雑誌『主婦之友』において主婦たち自らによって表明されている。

どういう時代でも時間や経済的に多少の余裕のある人たちとの中に、社会のために捧げようという気持ちももつた人が必要なのではないかと思いますが、廣く日本の家事から解放された主婦たちの間に、そういうことに気を向ける気運がひろがってゆくように、それがこれからの主婦の一つのあり方ではないかしらと私は考えているのです²⁴

団地では家電の購入などによる月賦払いに迫られて、内職が広く行われていたが²⁵、団地の主婦たちは社会に貢献するための時間的・経済的余裕を持ち始めていた²⁶。団地の主婦たちは、炊事洗濯と低い姿勢から解放されて立ち上がるとともに、自治会活動を通して団地のために立ち上がったのだ²⁷。

2. 子どもを通した人間関係

立ち上がった団地の主婦たちはどのように交流を持っていたのであろうか。1961年に『朝日ジャーナル』が「団地の人間関係学」という記事で、東京のひばりが丘団地と青戸団地、大阪の香里団地の合計三つの団地で行った団地生活に関するアンケートで、団地内での交際について調査している。団地内の交際について「棟外では交際軒数が少ないけれども、棟内よりは、はるかに親密な関係が結ばれている²⁸」という結果になっている（表1）。この調査において興味深いのは、物理的な距離が近い棟内よりも、居住棟外の方が親密な関係が結ばれているという点である。「棟内では主婦の場合、当然のことながら真向かいの家と最も緊密な関係をもってはいるが、平均して交際の濃度は立ち話程度をこえていない²⁹」のだ。交際軒数については、居住棟内の方が多くなっているが、友好点では棟外の方が高くなっている。

表1 条件別交際範囲（一人当たり平均値）

	平均交際軒数				平均友好点			
	向かいの家	階段内	棟内	棟外	向かいの家	階段内	棟内	棟外
ひばりが丘 男	0.8	2.69	3.02	0.95	1.21	1.15	1.09	2.35
ひばりが丘 女	0.94	4.67	5.07	1.75	1.84	1.65	1.75	1.81
青戸 男	0.87	4.31	4.83	0.57	1.22	1.29	1.21	2.65
青戸 女	0.92	5.83	7.32	1.18	1.85	1.58	1.47	2.18

「団地の人間関係学」7頁より筆者が作成

表2 団地内親友との交友動機

	前からの知り合い	職業上のつながり	気が合う	団地内の集まりで	子どもを通じて	近所だから	その他	無回答
香里 男	33.80%	46.30%	5.00%	2.50%	5.00%	2.50%	5.00%	0.00%
香里 女	21.60%	14.00%	14.00%	1.40%	17.60%	9.40%	19.00%	1.40%

「団地の人間関係学」7頁より筆者が作成

団地での交流は、棟外の方が親密な関係を持っていた。このことに関して香里団地だけではあるが、交友の動機を調査している(表2)。この調査は男女別で行っており、男性は「前からの知り合い」と「職業上のつながり」が多数を占めており、団地とは関係の無い動機である。女性は「前からの知り合い」が高い数値を示している点では男性と同じであるが、「気が合う」と「子どもを通して」という団地での交流を通して生まれた関係が男性よりはるかに高くなっている。表1の結果も踏まえて男女差をまとめてみると、男性の交際軒数は女性より少なく、団地とは関係のない動機で人間関係が構築されている一方で、女性の交際軒数は男性より多く、団地での生活を通して生まれた人間関係を持っていると言える。団地の交流には男女で差が生じていた。

団地における人間関係の男女差には、団地での生活時間の違いが反映されている。「団地は〈女の町〉だ」といわれる。大部分の亭主たちによって、団地は、文字通りのベッドタウンにすぎないからだ³⁰や「女房にとって、ニュータウン。亭主にとっては、ベッドタウン³¹」と言われるように、都市へ通勤している男性にとって、団地は休むための空間であり、「団地のパパ族は・・・特別の例外を除いて、団地内の交友を求めようとはしな³²」かった。逆に、「女房たちはそれぞれの巣、つまりコンクリートの白い壁の中で、だれもかれもが女王然とかまえ、朝、亭主たちをそれぞれの勤め先に送り出したあとは、電化ですっかりヒマになった時間をもてあまして³³」と皮肉めいた口調で語られる主婦たちは、団地で親密な人間関係を作りやすかった。「(パパの)団地内の人間関係は、ママさんの一割にも満たない³⁴」と言われるように、団地における人間関係は主婦が積極性を持っていた。

団地における人間関係は、どのように生まれていたのだろうか。読売新聞で1959年7月1日から7月19日まで15回に渡って連載された「ダンチ」特集の第1回目の見出しは「階段が基盤の交際」となっている³⁵。記事では、わずらわしい近所付き合いをしなくていいことが団地の利点ではあるが、団地は共同生活であり、近所付き合いをしなくてもいいというのは相対的なものにすぎないことが指摘されている。団地は構造上階段を共有せざるを得ない以上、通勤や買い物の行き帰りなど隣人に出会う可能性が大いにあり得る。団地において階段は近所付き合いの最小の範囲になるのだ。この特集の第3回目では、ある家族が階段を共有する八世帯による集まりに参加しなかったため、輪番にしている階段掃除の道具を回してもらえなくなったというエピソードを「階段八分」と名付けている³⁶。集団生活である団地において、円滑な隣人関係を築いていくために階段は重要な単位であった。

当時、団地住民が団地生活を記したエッセイが数多く出版されているが、こうしたエッセイにおいても、階段の重要性が説かれている。例えば、塩田丸男の『住めば団地』では「階段社交術」という章が設けられ、「団地のつきあいの最小単位は、この階段を共同する八戸である³⁷」と述べられている。「階段は団地マダムたちの社交場³⁸」であり、その機能を十分に理解しておくことは団地生活に必要なテクニクであった。また、階段はただの隣人付き合いだけでなく、自治会活動と関係を持つことがあった。両者とも団地居住経験を持つ秋山駿と原武史が行った対談におい

30
埜沢宏『団地』真珠書院、1964年、17頁。

31
塩田丸男『体験の団地生活術』オリオン出版社、1968年、104-105頁。

32
塩田丸男『住めば団地』サイマル出版、1963年、153頁。

33
埜沢、前掲書、17-18頁。

34
塩田、前掲書(1963年)、154頁。

35
読売新聞、1959年7月1日朝刊10面。

36
読売新聞、1959年7月3日朝刊10面。

37
塩田、前掲書(1963年)、164頁。

38
同上、169頁。

て、秋山がひばりヶ丘団地の自治会活動が階段を通して行われていたことを証言している。「自治会活動で困るのは、階段会議というのをやるんですよ・・・四階建てですから一つの階段の両側に八戸ある。次は二階の家、次は三階って順々に場所を変えて会議をする・・・うちは共稼ぎで生活形態がちがうからそういうのはやらないんだ。だから村八分みたいな立場になる³⁹⁾」と階段と自治会活動の関係を述べている。団地において、階段は自治会活動とも結びつきながら、近所付き合いの最小単位として重要な意味を持っていた。

映画においても団地の階段は、重要な意味を持っている。松田道雄の育児書を映画化し、1962年のキネマ旬報年間ベスト10で第1位に選出された『私は二歳』(市川崑監督、1962年)は、小川太郎という二歳児の目線で進行していく。母親である千代が目を離した隙に、太郎が部屋から抜け出して階段を上ってしまうシーンを見てみよう。太郎がいないことに気がついた千代は外に出て、階段の上にいる太郎を発見する。そして、そっと近づいていき、後ろから太郎を抱きかかえて強く抱きしめる。泣き出す太郎の声を聞きつけて、隣人の奥さんと通りがかりのクリーニング屋の男性が階段へと飛び込んでくる。「どうしたのよ。ちょっとあなた離しなさいよ、たーちゃんを。そんなきつく抱いたら息がつまっちゃうじゃないの」と隣人の奥さんは千代の腕から太郎を離す。千代は「お昼寝してたから、奥で片付けものしてたのに、気付いたら居なくなって、この階段の上の方に居るんですもの。声を出したらびっくりして落ちるかもしれないと思って、息をつめて上がって行って、とっつかまえてやったのよ。ああ、びっくりした」と安堵している。このシーンでまず注目すべきは、太郎の泣き声を聞いた隣人の奥さんとクリーニング屋の男性がすぐに集まってきていることである。団地の公共空間である階段には、誰でも入ることができ、子どもの泣き声が聞こえれば、近所の人が集まってくるのだ。

このシーンで、重要なのは階段が女性優位な空間として機能しているという点である。クリーニング屋の男性が「こんな階段から落ちたらイチコロだ。私はやっぱり日本式の木造家屋で育てるべきだと思いますね。団地は子どもを育てる場所じゃないですね」と言う。すると、男性は奥さんに睨みつけられて、「あら、あんたのお店はこの団地のおかげでもってるって聞いたわよ」と一喝されてしまう。階段は誰でも入ることはできるが、女性が男性を一喝する女性優位な空間となっている。

千代はこの女性優位な階段で立ち上がる身体を獲得している。夫の五郎の身体と比較しながら見ていこう。千代は階段を上っていた太郎を後ろから覆い被さるように抱き上げている。同じ階段で、五郎は太郎が抜け出さないように柵を作るためにかがんでいるシーンがある。そして、太郎はその柵を乗り越えていくことを夢想する。千代の身体は太郎を捕まえることができるが、五郎の作る柵は太郎に乗り越えていくことを夢想されてしまう。さらにそのときの姿勢は、千代が太郎を立ったまま抱きしめている一方で、五郎はかがんだ姿勢で柵を作っている。千代が立ち上がっていたその同じ階段で、五郎はかがんでいるのである。このように、千代は階段で立ち上がる身体を手に入れており、階段は身体的にも女性優位の空間となっている。

『私は二歳』には団地の公共空間として公園も登場している。この公園は主婦たちが団地の問題点を確認し合う空間として機能している。団地内の建物の2階の窓の手すりに女の子が掴まっている。女の子が手すりを揺さぶると、手すりが外れて、女の子は空中に投げ出されてしまう。ちょうどその時に下を歩いていた牛乳屋が女の子を受け止めて、九死に一生を得る。アツシちゃんのお母さんに太郎を預けていた千代は、この事件を聞きつけて公園へと走っていく。この時のアツシちゃんのお母さんの台詞を少し長いがそのまま引いてみよう。

どうしても託児所がいるってことなのよ。子どもに怪我させないどころかと思えば、家の中へ閉じ込めておくか、親が仕事を放っというて監視するかでしょう。親も子どもも自由がなくてヒステリーよ、まったく。団地の事務所じゃ、保育所は児童福祉法でやるので貧困家庭が目標だから、こんな結構な住宅に住んでいる人たちの為に建てられないし、建てる予算も無いって、いくらかけあっても埒が明かないから、私たちだけでやろうかって昨日も話していたとこなのよ

団地が子どもにとって危険な空間であるという認識を主婦たちが共有する空間として公園が登場している。共通認識を持った主婦たちは、保育所設置のために自ら行動し、自分たちで保育所をやるという案まで用意している。

この時、話をしていたアツシちゃんのお母さんに、「アツシちゃんのお母さん」という役名しか与えられていないことに注目してみたい。アツシちゃんのお母さんは違う棟に住んでいるが、千代と交流を持ち、公園で太郎の面倒を見ている。アツシちゃんのお母さんは別のシーンでも登場する。ある日、アツシちゃんのお母さんが慌てて小川家にやって来る。すると、「アツシが麻疹になったんですよ。おとつい砂場で一緒に遊んだでしょう。たーちゃんにうつしちゃったんじゃないかって」と言っ、て、診療所に行くことを勧める。アツシちゃんのお母さんは子どもを通してしか千代と交流を持っていない。アツシちゃんのお母さんがこの作品に登場するのは、公園でアツシちゃんと太郎の面倒を見ているときであり、アツシちゃんの麻疹が太郎にうつっていないか確認に来るときだけなのである。アツシちゃんのお母さんは、アツシちゃんの「お母さん」であることが決定的に重要なのだ。

『私は二歳』における階段と公園における交流を見てきたが、両方の空間において、子どもが重要な意味を持っていた。階段において隣の奥さんが出てくるのは太郎の泣き声を聞いたからであり、公園ではアツシちゃんのお母さんが太郎の面倒を見ている。団地の公共空間で生まれる交流には子どもが関わっているのだ。これは『団地ママ奮戦記』というエッセイにおいても見られる。このエッセイには憧れの団地に移り住んだものの、生活環境が整っていない上に、子どもにとって危険な場所がたくさんあることに気づいた主婦たちが積極的に自治会活動を行っていく様子が記されている。この著者が団地での交流を生み出していききっかけも子どもであった。入居当初は知り合いがいなかった著者が「子どもの話題を通して、同じくらいの子どもをもつ母親たちと知り合いになりました。ここでも子どもは、新しい人間同士の「かすがい」になった⁴⁰⁾」と述べているように、団地において子どもを持っている

40

滝いく子『団地ママ奮戦記』新日本出版社、1976年、30頁。

ということは、団地の持つ問題を共有するということであり、『団地ママ奮戦記』ではこうして生まれた人間関係が自治会の結成へとつながっていく。団地において生まれる交流は、子どもを持つ母親であるということが大きなきっかけとなっている。

次にオムニバス映画である『団地 七つの大罪』（千葉泰樹、寛正典監督、1963年）の第七話「文明の罪」を見てみよう。この作品には、団地の集会場で自治会・婦人部定例会が開かれているシーンがある。この集会場では、作品の第一話から第六話までに登場していた主婦たちが勢揃いしている。そこでは、公団との話し合いの末に、団地にセルフサービスクリーニング機が設備されることが決まったと報告される。家の洗濯機では洗えない背広やスーツのクリーニングが可能になり、下着や浴衣など一週間分まとめてクリーニングできるため能率的である。さらに、値段はクリーニング店の半値程で、時間も短縮できる。これによって、洗濯は一週間に一度まとめて出来るようになるため、主婦たちはその分の時間をサークル活動に充て、教養を高めることが出来ると喜ぶ。すると、洗濯はだれにでもできるようになったと、第一話から第六話まで登場していた男性が大量の洗濯物を抱えて洗濯場へ集まってくるシーンになり、主婦は完全に洗濯から解放されることとなる。「文明の罪」でも『私は二歳』のように夫婦関係において妻が優位に立っている。この集会場のシーンには、子どもが映し込まれている。このショットは、自治会活動と子どもの関わりを示している。団地のために奮戦するにはママである必要があるのだ。

3. 立ち上がれない直子

それでは、『彼女と彼』の分析に入っていこう。『彼女と彼』は子どもを持たない団地の主婦である石川直子と団地の隣にあるバタヤ集落の人びととの交流を描き、主演の左幸子はベルリン国際映画祭で女優賞を獲得している。団地の主婦たちは、家電やステンレス製の流しによって立ち上がる身体を獲得し、子どもを通して団地の公共空間で交流を持っていた。ところが、空間的には高い位置を占めながらも身体的には低い姿勢をとるという曖昧な身体を持ち、子どもを持たない直子は、団地の公共空間でどのような交流を持っているであろうか。

まず始めに階段を見てみよう。この作品は団地の隣にあるバタヤ集落で夜中に火事が起こるシーンから始まる。火事の音に気が付いて目覚めた直子は隣で寝ている夫の英一を起こす。そして、隣人に火事を伝えるために階段へ出て、「火事ですよ」と言って回る。ところが、直子の声が響くだけで、隣人は出てこない。『私は二歳』で太郎の泣き声に反応して、すぐに出てきた隣人の奥さんと違い、直子の声は隣人に全く響かない。

バタヤ集落での火事の翌日、子どものいる主婦たちが集会でコーラスをしている中で、直子は焼け跡を見に行き、眼の不自由な女の子である花子に出会う。そこで直子は「としお」と名前の書かれた車のおもちゃを拾う。車には30-305と書かれており、直子はそのおもちゃを返しに、30号の305号室の部屋を訪れるが、相手の

主婦は扉を半開きにしたまま、階段へは出てこない。直子は階段で交流を持つことができないのだ。その後、自分の部屋に帰るために階段を上っている直子を見ながら近所の主婦二人が話をしている。この主婦二人は、直子が大陸から引き上げてきたこと、身寄りがいないことなど、直子の噂話をしているが、直子に直接話しかけることは無い。直子は階段において、人間関係を築くことが出来ない。直子は子連れの主婦たちがコーラスをしている集会場に入っていくこともなければ、階段で他の主婦たちと交流することもない。直子にとって、団地の公共空間は交流の場として全く機能していないのである。

団地の公共空間である公園はどうだろうか。やはり、公園も直子にとって、交流の場として機能していない。直子が部屋からふと窓の外を見ると、団地の公園がある。その公園では子どもたちが遊んでおり、ベンチでは母親たちが話をしている。母親たちと目が合った直子は軽く頭を下げて挨拶をする。しかし、母親たちは目をそらしてしまい、直子は部屋の奥へと戻って行く。このシーンにおいて、母親たちは公園で交流を持っているが、直子は相手にされない。公園も直子にとって交流の場として機能していないのだ。他の主婦たちと交流を持てない直子は、ある日の夜にベッドで寝転がりながら、コンクリートの壁をたたき「山の中にいるみたい。誰もいないみたいね。隣にもお向かいのアパートにも」と呟く。団地の公共空間から排除されることで、人間関係を構築できない直子は、バタヤ集落の子どもたちや、英一の大学の同級生でバタヤ暮らしをしている伊古那と交流を深めて行くことになる。

直子と伊古那はどのように交流を持っていくのであろうか。直子には家電による時間的な余裕があるが、団地内での交流を持てていない。団地での新しい人間関係を築けていないのだ。団地で孤立している直子はバタヤ暮らしをしている伊古那を見かけ、立ち話をするようになり、伊古那は部屋までやって来るようになる。後日、団地の塵芥置場で主婦と屑屋が廃品取引の交渉をしていると、屑屋の車の中に、英一のトロフィが見つかる。屑屋が伊古那から買ったと言うと、英一と直子はバタヤ集落に乗り込んでいって、伊古那にこれは盗みだと問いただす。その後、伊古那が直子の部屋まで弁解に来るシーンを見てみよう。拾ったと言う伊古那に対して、直子は帰ってくださいと交流を断とうとする。扉を閉めてチェーンロックまで閉めた直子は、最終的に伊古那を許して、部屋へと招き入れるが、その理由は明示されない。伊古那を追い払った直子は、家事をするが洗濯機などの家電によってすることがなくなる。直子がチェーンロックを外して階段を見ると、伊古那はまだ座り込んでいる。頑なに拾ったという伊古那に対して、直子は「何だか判らなくなったわ」と、伊古那との関係を断ち切ることができない。時間的な余裕がありながらも、団地内で交流を持てない直子は「前からの知り合い」である伊古那と交流を持たざるを得ないのだ。

直子はバタヤの伊古那と交流を深めていく一方で、団地とバタヤ集落は断絶されていく。団地の塵芥置場にバタヤの住民がやって来て、廃品を拾っていていたが、主婦たちが「貴方がたはもう来ないで下さい。結構ですから」と、追い払うようになる。そして、団地とバタヤ集落の間に柵を設けて、バタヤが団地内を通ることさえもできないようにする。一緒に戦争ごっこをしていた団地の子どもとバタヤの子ど

もも、柵が作られた後には、遊ぶことがなくなる。さらに、開発は進みバタヤ集落は取り壊されていく。バタヤの人々が次々に立ち退いていく中で、伊古那だけは残っていた。伊古那が柵をこえて侵入しているのを見かけた団地の子どもたちが、「あいつ、悪いやつだよ」、「がんこおやじだ。出て行かないんだもの」、「犬を隠していじめてやろう」と、伊古那の犬であるクマに縄をかけて殺してしまう。クマを失った伊古那も姿を消す。直子と伊古那が交流を深めていく一方で、団地はバタヤを空間的に断絶していき、完全に排除していく。

バタヤの子どもたちや伊古那に対して優しくする直子を不審に思った英一は、直子と公園で話し合いをする。このシーンで初めて直子は公園に入ることができるが、直子は英一との関係もうまくいかない。火事の翌日に出会った盲目の女の子である花子が熱を出し倒れているのを発見した直子は、英一が出張で家を空けている間、家に連れていき看病をする。そこに帰ってきた英一が、直子とともに公園へ行き、話し合いをする。花子がどんな子なのか説明しようとする直子に対して、英一は「分からないんだ。君にとって彼らは何なんだ」、「君はあの連中に憧れているだけなんだよ」、「君自身にもはっきりしないんだよ、自分が何を望んでいるのか」と話を聞こうとしない。そして、「普通の家庭を守りたいんだ」と言われた直子は「私ね、あなたの子どもを産む自信が欲しかったのよ」と自分の心情を話す。団地の母親たちに無視されたその同じ公園で、直子は子どもを産む自信が欲しかったと心情を吐露するのだ。子どもを産む自信が欲しかったと言う直子に対して、英一は「それとは別の問題だよ」と素っ気ない返事をして、家で看病したいという直子に反し、花子を病院へと送る。団地の主婦たちと交流を持ってない直子は、夫である英一からも分化されているのである。

バタヤ集落は壊され、伊古那と花子が姿を消すと、直子は完全に行き場を失う。団地の公共空間から排除され、団地内での人間関係を築けなかった直子が唯一、関係を持っていたバタヤ集落が破壊されてしまうのだ。行き場を失った直子は立ち上がることなく、ベッドで寝ているシーンで映画は幕を閉じる。ただコンクリートの壁を見つめるだけの直子は、「コンクリートの壁に象徴される「私生活主義」と団地自治会に象徴される「地域自治」とが同時並行的に現れ⁴¹⁾ていた団地において、「私生活主義」へと押し込まれている。

団地住民であった塩田丸男は「日本の団地はアメリカの貧困者住宅なみなので、むしろ、日本では政治に比較的関心の薄い婦人でさえも団地に住むことによって、体制への批判を自覚させられるという現象が起⁴²⁾ってくる」と論じている。戦後日本の住宅環境は劣悪なものであったため、団地は相対的には豊かな住宅ではあった。ところが、団地では保育所や小学校の不足、交通機関の不備など生活をする上で切実な問題と向き合わざるを得なかった。団地の主婦たちが立ち上がるのは、憧れの団地に入居しても降りかかってくる問題から家庭を守る必要があったのだ。しかし、この団地の「主婦」には誰が含まれていたのであろうか。当然のことながら、団地には子どもを持たない主婦や独身女性も住んでいる。独身女性は映画だけでなく、団地住民によるエッセイでもほとんど言及されることは無い⁴³⁾。子どもを持たない主

41
原『団地の空間政治学』、57頁。

42
塩田丸男『団地住民の政治感覚』『潮』Vol.91、
1968年、123頁。

43
映画では『フランケンシュタイン対地底怪獣』
(本多猪四郎監督、1965年)、エッセイでは塩
田丸男『住めば団地』(サイマル出版、1963年)
に団地の独身女性が登場している。

婦は『団地 七つの大罪』の第五話「励みに励む罪」に登場しているが、子どもができると1DKから広い2DKの部屋に優先的に引っ越しができると、子どもを欲している。立ち上がったのは「主婦」ではなく、「母親」だった。その中で団地の公共空間から排除される直子の曖昧な身体は、「母親」であることに価値を与える団地のあり方を問題化しているのである。

おわりに

マクナイトは団地をジェンダー化された空間として論じている。団地がプライベートな室内において、家庭の主体として家にいる女性と仕事で通勤している男性を分割している点を強調しているのだ⁴⁴。そして、このジェンダーによる分割に家庭と政治経済を結びつける主婦という「政治性」を見ている。ところが、マクナイトが論じた団地妻映画以前の『彼女と彼』において直子の曖昧な身体は、この「政治性」から溢れている。戦後の住宅不足を解消するために登場した団地には⁴⁵、2DKの間取り、ステンレス製の流しやシンダー錠などの設備が用意され、夫婦と子どもからなる核家族が移り住んできた。鉄筋コンクリート造の高層住宅が立ち並ぶ団地には、住宅や設備・家族形態など画一的な規格が詰め込まれていた。さらに、家電の普及は、団地で生活する主婦たちの身体感覚をも画一化していった。家電を使って家事を合理的に行い、子どもを育て上げる団地的主婦たちは、「良き妻・母・消費者」という役割を積極的に引き受けていた。原は、団地では革新政党への支持が高く政治思想的には進歩的だったと論じている⁴⁶。しかし、団地的主婦たちの連帯は、革新政党の支持という政治思想を見せながらも、固定的なジェンダー役割を積極的に引き受ける存在として、西側自由主義体制を支えているという「政治性」を持っていた⁴⁷。その中で、子どもを持たない直子は曖昧な身体を持ち、主婦たちの連帯から疎外され、夫である英一からも分化されて、孤立している。さらに、団地は画一化を推し進める中で、パタヤ集落を排除したように外側の空間へも影響を与えていった。戦後復興から高度経済成長を迎える1950年代半ばから1960年代にかけて、人気を博した団地における画一化に反する存在として、完全に排除されることもなければ、交流の中に入ることもできない直子の曖昧な身体は存在したのである。

原は団地の自治会において「主婦」が主導的な立場にいたことを明らかにしたが、その「主婦」が「母親」であったとすると、原とルブランの論は接続可能である。ルブランは「主婦」について次のように論じている。

労働組合のリーダーや銀行経営者といった、政治的に重要となりうるほかのアイデンティティとは違い、主婦とは、真にふさわしい名称が全く存在しないなかで、女性の社会的自己にとってのラベルになると思われる。主婦は、ジェンダー役割についての女性たちの決意と、現代の郊外地域において弱まってしまったコミュニティの結びつきとが組み合わさることで、女性のアイデンティティとなるのだ⁴⁸

44

McKnight, 前掲書、2頁。

45

団地を建設した日本住宅公団は、戦後10年を経ても続く住宅問題を解決するために設立された。塩田丸男『住まいの戦後史』サイマル出版、1975年、80-81頁、本間、前掲書、414頁などを参照。

46

ひばりヶ丘団地では保育所不足を共産党が支援したために、革新自治体ができていた。原『レッドアローとスターハウス』参照。

47

土屋由香『親米日本の構築——アメリカの対日情報・教育政策と日本占領』明石書店、2009年、217-219頁。土屋は固定的ジェンダー役割に基づく家庭生活がアメリカによって、近代的な資本主義社会のあるべき姿として輸出されたことを指摘している。

48

ルブラン、前掲書、87頁。

ルプランがフィールドワークを行った東京郊外と、団地はその地域に新しくやってきた知らない者同士が住む場所という共通点があった。その中で、「主婦」は新しい連帯を生み出すのに便利な手段だったのだ。その一方で、郊外と団地の違いは、住環境にあった。入居が始まったばかりの団地では、必ずと言っていいほど保育所の不足の問題が起こっていた⁴⁹。爆発的に増加する乳幼児に対応できていなかった団地では、ジェンダー役割についての女性たちの決意は、「主婦」よりも「母親」が前景化していた。家庭の主体として主婦の役割を引き受けるという「政治性」のもとでは、積極的な公共活動への参加という「政治」活動を取るのか、「政治」活動を忌避するアイデンティティを選択するのかは、環境に左右されたのだ。

付記 本稿は日本映像学会中部支部2014年度第3回研究会(2015年3月14日愛知淑徳大学)での研究発表「居住空間イメージの戦後—1960年代団地における主婦を中心に」の一部を、執筆にあたり加筆・修正したものである。